OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈特別エッセイ〉 III. 玉井教授のご先輩の方々より
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 2010, 48, p. 127-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

III

（玉井教授のご先輩の方々より）

好感度 No. 1 の玉井さん

藤　田　　繁

「玉井教授との思い出」を書くようにという編集委員会の御希望でありますが、玉井さんは現在もおつきあいして下さっていますので、思い出の形成中ということになります。そういう中で、玉井さんのお人柄と学者としてのお姿について一筆啓上させていただきます。

玉井さんのお話では、*OLR* に 10 号より参加されたとあります。1962 年春の創刊号は、藤田実さん、藤井治彦さん、森晴秀さんらが中心になって世に出ました。準備されていた 1961 年は私は修士 2 年で、博士課程の諸先輩がヒマラヤ山脈のように輝やかしく崇高に見えました。*OLR* はそのオリュンポスで鍛えられて光を見、幸い暖かく世に迎えられました。私も編集に携わることがあって、堺東の大阪刑務所に印刷のことで何度か足を運びました。経費は安かったのですが、熟練の囚人が退所して校正がとどこおったりしました。論文は 400 字詰 20 枚以内と決っていました。それでも、私たち *OLR* 一期の同人は、この機関誌によって学者として船出したのです。その後、藤井さんの提案で初期の同人は全員が退会して、後輩の新風にまかせましたが、その舵取りをなさったのが玉井さんではなかったかと思います。今日の *OLR* の隆盛は玉井さんなしには語れません。

玉井さんのことはかねがね噂もきいていましたし、学会での発表も何度かうかがっていました。深い学識もさることながら、聡明で謙虚な方だという印象をうけておりました。親友の植田和文君が『群衆の風景』で阪大より学

位を授与されたとき、主査は玉井さんでした。祝賀会での玉井さんの挨拶を伺って、その感を深くしました。

玉井さんと更に近しく接しましたのは、日本ハーディ協会創立50周年記念論集『トマス・ハーディ全貌』を共に編集したときでした。鮎澤乗光、深澤俊、森松健介、そして玉井さんと私の五人が編集委員でした。この折も、玉井さんの貢献は特筆すべきものでした。どのような内容にするかを決定したのは、玉井さんが出して下さった「目次」の概要でした。私たちはそれを叩き台に、具体的に該当者を決め、公募の枠を策定していったのです。私を除いた全員が、実力者であると共に、温厚な人びとだったので、まことにスムーズに仕事が運びました。2007年10月のハーディ協会創立50周年記念大会にあわせて、音羽書房鶴見書店より出版されたこの本は、日本ハーディ協会の総力をかけたものとなりました。同協会の実力はこれ以上でもなければ、これ以下でもない、必要にして十分な記念論集となったのは、玉井さんの力によるところが大きかったのです。

愚息は中学二年生で週1度塾に通っています。その都度試験があるらしく、時おり本人の得点と全体での位置を示した丁寧な報告書が届きます。そのデータの一つに、5科目の図表があって、彼の場合、美しい5角形になることが多いのですが、遺憾ながらレヴェルの高い点数ではありません。これに対し、玉井さんの場合は、非常に高いレヴェルで、美しい5角形を描いています。大学の理想は高度の教育と研究を提供することにあるのでしょうが、玉井さんはそれが出来る方です。学力、人柄、実行、センス、可能性等をすべて備えておられます。現代文学理論にも精通され、かつ旧来の読み方にも理解を示されるバランス感覚をお持ちなのです。聞くところによれば、日本英文学会が大きくゆらいだときも、玉井さんが頼られたとか。そのような方なので、私は金沢大学の集中講義においで願ったし、人事のことで相談にのっていただくこともあったのです。

現在、英文学は日本では下降気味です。そもそも文学が軽視され、たとえ

ば石川県では文学部は姿を消しました。そんな中で、日本ハーディ協会の会長を引き受けていただきました。阪大を定年退官なさっても、玉井さんを必要とする大学は数多くあることでしょうし、日本ハーディ協会を始めとする学会は、玉井さんの学識と人望を渇望しています。これからも御健康に留意され、世のため人のため、そして何よりもご自分のために、御活躍下さいますよう。玉井さんの唯一の欠点は欠点がないということ――羽目をはずしたいと思われたら、金沢に遊びにおいで下さい。

（金沢大学名誉教授）

思い出すこと ― 英文科研究室の玉井さん

今　沢　　達

勤めが福岡から神戸に変わり、文学部の集まりにも出やすくなった。そのうちに、教養部の非常勤講師として週1回通うようになり、村上先生のご退官の記念論文集の編集もあって、英文科研究室に立ち寄ることも多くなった。英文科とはもちろん教授、助教授、助手が揃う組織を指すが、私にとって、紀要や同人誌、新聞が置いてあり、先生たちもよく立ち寄られるサロンのような助手の研究室が英文科研究室であった。玉井さんの助手着任と私の転勤は同時で、それから数年の間は研究室に行けば玉井さんに会うことができた。

研究室にお邪魔して、お茶をいれてもらって雑談をしていると、時には、当時はまだ教養部にいた藤井さんが入って来て、学界の動向や仲間のだれかれについて話が盛り上がる。玉井さんが人懐っこい微笑を浮かべ、眼鏡の奥から目を輝かせて、『「僕」を使って、文章を書けたらいいですね。芥川みたいに』というのを聞いたのはそんな折だった。そのときはまだ、玉井さんのことはワイルドを研究しているという外、あまり知らなかったが、その言葉を耳にして、玉井さんの発想と文体に対する意識について鮮明な印象を受け

たことを覚えている。私自身はと言えば、「公」に対する「私」、社会に対峙する「私」に関心が向かっていて、「僕」を使うことを考えたことがなく、はっとしたものである。自分より若い世代にそういう感覚が生きていることが興味深かった。

その後、玉井さんが大学の教職に就いてから、私にも紀要に発表した論文を送ってくださった。ワイルドの戯曲についての周到に考え抜かれた説得力のある論文だった。そこに見出される犀利な分析、堅固な構成は芸術や人間に肉迫する玉井さんの強靭な知性を示していた。そして、どういうわけか、私は先の『「僕」を使って、文章を書けたらいいですね。芥川みたいに』という玉井さんの言葉を思い出していた。しかし、その時は、前段の「『僕』を使って」という部分というよりは、後段の「芥川みたいに」という部分が特に強い連想を伴って思いだされた。論文に現出していたのはワイルド、芥川、吉田健一に連なる主知主義的な批評精神であった。その後も玉井さんからは論集や、講座などに寄稿された論文を送って戴いた。それらの論文は新しい批評理論をよく読みこなした上で、世紀末の文学やビクトリア朝小説を読み直した知性の力技というべき見事な分析であった。理論が苦手な私はそれらを通じて、最新の批評理論のことを垣間見ることができた。

これもまた私が関西に帰ってきたころのことだが、近くに住んでいる卒業生にもお声が掛かり大学院生の送別会に出席したことがある。仙葉さんや、松阪さんと親しく話をしたのもそうした席のことであった。お世話をしてくださったのは、これまた、玉井さんであった。また、英文学会の全国大会が開催されると、出版社が設けてくれる酒席に来るようにと誘ってくれるのがいつも玉井さんであった。その方面での付き合いが少ない私には、若い人たちや他の大学の方たちと知り合うことができて有難かった。鋭利な論文からうかがわれる玉井さんとはまた違った玉井さんがいた。それで思い出すのは、阪大の英文学会の時だったか、学会の進行について助手として忙しく立ち働いている玉井さんのことを、S先生が独特の抑揚をもって言われた「のんび

りしてるからなあ」という言葉である。藤井さんの俊英のお弟子さんという印象が強い私は意外なことを聞くものだという思いがしたが、考えてみると、玉井さんにはたしかにそういう一面がある。ゆったりとしていて春風駘蕩という雰囲気がある。出身地、和歌山の風土がそうさせるのだろうか。はにかみ屋のようでありながら、粘りがあり、活力がある。

関西の学風は、理論よりはどちらかというと、テキストの読みを尊ぶところがある。玉井さんは、テキスト派の伝統の中にありながら、理論にも強い点で異色である。理論に強いばかりではなく、それを文学教育実践の具体的な場に生かして批評理論の教科書を大学院の学生との共同作業で編集する行動力がある。学外の各方面との幅広い交友関係も、文学理論への知的関心の共有もさることながら、怜悧であり、かつ茫洋としたお人柄によるものであるかもしれない。「玉井さんは書かせるのがうまい」と言われることになるゆえんである。おっとりしているようで、組織力がある。都会性と田舎性の絶妙な釣り合いであろうか。

最初に引いた「僕」は若き日の玉井さんにとって平板な「私」よりも、肉声に近い発話を誘うものであったのかもしれない。芥川自身もそうかもしれないが、当代の若い俊秀にも自由闊達に「僕」を使って論陣をはる人もいる。個性を殺して、お行儀よく「私」に納まるのではなく、思うところを遠慮なくぶつける若々しい「僕」への憧れだったかもしれない。そうした意味では、「僕」的要素はその後の玉井さんの学界での活躍の中にじゅうぶん具現されているようにも思われる。玉井さんの周辺には単なる君、僕の世界と重なりつつ、それとは微妙に異なる、玉井さんが敬愛する山崎正和氏の「社交する人間」たちの世界が出来上がっているかもしれない。谷川俊太郎はあるところで、「私」にくらべると「ぼく」には傷つきやすいというところがあると興味深いことを言っているが、僕であれ私であれ、一区切りされた玉井さんがこれからどんなものを書くか楽しみである。

（神戸商科大学名誉教授）

玉井さんの文学批評 ——私見

植田和文

玉井さんと出会ったのは1970年代初頭であった。その頃、世紀末文学を研究している優秀な院生がいると聞いていた。当時私は、世紀末文学と聞けば、オスカー・ワイルド、『サロメ』、ビアズレーの挿絵、デカダンという連想が浮かぶ程度だった。だから、その世紀末文学の研究者が、目元涼しい丸顔の、やわらかな関西弁を喋る、育ちのよい坊ちゃん風の青年であるのを意外に感じた。もう少し古い友人に、同じく世紀末文学研究の山田勝さんがいた。彼は生活の美化をも目指していて、その点ワイルドに似ていた。玉井さんの生活態度は知らなかったが、作品の綿密な読みと美的鑑賞・観照を実行していて、ペイターに近かったのではないだろうか。とはいえ彼に隠遁者めいたところはなく、いつもニコニコしていて人好きのする人柄だった。倦怠や虚無とは無縁であり、それを気取ることもないようだった。玉井さんと山田さんが、のちにイギリス世紀末文学の研究者とし大成し、世紀末文学が時代遅れの遺物ではなく現代的意義を持っていることを世に知らしめたのは、喜ばしい限りである。

1970年代初めは破壊と暴力と激変の時代であった。学園闘争と内ゲバ、連合赤軍のテロ、三島由紀夫の自決、末期のヴェトナム戦争、ウォーターゲイト事件。私は無力なノンポリであったが、浮き足立った毎日を送っていた。こういう時代に唯物論ならぬ唯美論に専念するのはどういう心理だったのだろう。平時ならぬ異常時だからこそ、美が時代に対する反措定として光り輝いたのだろうか。玉井さんに審美主義文学に惹かれたきっかけは何であったか聞いてみたい気がする。ただその時代は今と違って、文学を人間の内面に関わるものとして重視する傾向が、活動学生たちにさえ、いやとりわけ彼ら

のあいだで、強かったように思う。

玉井さんとはあまり深い議論をしたことはない。しかしいつだったか三島由紀夫の「オスカア・ワイルド論」の話が出て、彼が「あれは凄い。あれですべて言い尽くされている」と言ったのを憶えている。私も同感であった。当時私はこのワイルド論がワイルドの作品そのものよりすばらしいという顚倒した考えを持っていた。それは25歳の三島が書いたエッセイで、次のような文章が、宝石を見せびらかすように、あちこちにちりばめられていた。「ワイルドの希臘は、ニイチェの希臘よりも、もうすこし単純な明快な概念で、官能の歓びから瀆神の怖ろしい歓びを差引いたアレキサンドリヤ風の円満な倦怠であり、これに加ふるにケルト英雄物語風な悲劇性であつた」。こういう文章は華麗で官能的であるのみならず、鋭い洞察を示していると思われた。これはペイターがモナ・リザを論じたときに典型的に見られる「印象批評」と同質で、ワイルドのいう「創造的批評」ではないだろうか。玉井さんがペイターの『ルネサンス』やシモンズの『象徴主義の文学運動』に熱中したのは、彼らの批評が詩や小説以上に想像的・創造的であったためではないだろうか。

その頃から、「新しい世紀末」を経て、40年近くが過ぎた。この間の玉井さんの活躍はめざましい。学会発表やシンポジウムは私が聴いただけでも数え切れない。阪大関係の学会、講演会、記念会などでは、いつも温顔の玉井さんがいて、司会や挨拶をしておられた。後進の指導・育成にも非常に熱心であった。私は玉井さんよりかなり年長だが、玉井さんに講義を持つよう勧めてもらったり、論文を読んでもらったりと、ずいぶんお世話になった。しかし、よくお会いして世間話などする機会が多いわりには、つっこんだ話をしたり、一緒に飲み明かしたりということはない。玉井さんとのつきあいは、おもに彼の送ってくれる著書・論文を通してである。彼の著書、論文集、翻訳、注釈書などは私の書架の1段を占めるほどである。玉井さんの書く論文は、新しい視点を提示し、論述の過程は緻密である。対象とする作品につい

て読者がよく知らなくても、巧みな論述に乗せられて面白く読めるのであり、これはよい論文の必要条件である。

玉井さんはこのところ、J・ヒリス・ミラーの批評について熱心に紹介し、論じておられる。ミラーがたどったような批評の遍歴は、玉井さん自身にもある程度当てはまるのではないか。早い段階から本人も意識していない脱構築的発想があった、というミラーについての玉井さんの評言も、彼自身に当てはまるのではないか。だからミラーに親近感を持つのではないか。とにかく、最近玉井さんは、ワイルドやトマス・ハーディの作品を対象に、脱構築的パーフォーマンスを実践しておられる。

脱構築批評の一面として、言語の指し示す内容に対して、言語そのものを前景化するという傾向があるだろう。玉井さんは「ハーディのリアリズムと手紙の言葉」という論文で、デリダとミラーに依拠して「手紙」に注目している。通常、手紙は差出人と受取人が決まっていて、一義的なメッセージを持ち、受取人に配達される。しかしハーディの作品において、手紙は、差出人不明、誤読、誤配、到達不能などのため一義的意味が決定できず、そのことが物語空間を混乱させるという。この意味決定不可能性、多義性はハーディの小説世界を表象している、と同時にすべての書き言葉（エクリチュール）の特徴である。この指摘は説得的であるが、読者は一瞬、位相の異なるエアーポケットに落ちたような感覚を味わうのではないか。なぜなら、書き言葉の意味するもの（この論文では＜伝統的社会と近代生活の相克＞という二項対立的テーマ）が細かく論じられる過程で、読者は書き言葉そのものを考察するよう促されるからである。『真面目が肝心』を論じた「快楽のゆくえ」という論文においても、＜制度内に取り込まれる欲望充足＞対＜慣習的な制度の枠外のアナーキーな快楽＞についての考察が、論文の後半では、「書かれたものとしての言葉」そのものの考察へと移ってゆく。言葉の指し示すものの解明と言葉そのものへの注視、そこにある断層みたいなものが、脱構築批評の奇妙な魅力の一面なのだろう。

書き言葉は文脈を離れても残存する。過去の記憶が現在に侵入し未来にも及ぶ。おそらくこのことと関係しているのが、「現在と過去の連続性、自己と他者の連続性」（玉井論文「ワイルドにおける文学の再生」による）というテーマである。ドリアン・グレイは、「人間とは無数の生と無数の感覚を有する存在であり、思想と情念の異様な遺産をみずから内蔵している複雑で多様な生きものなのである」と主張する。この認識は、「ヴィジョンのなかのローマ」という論文で展開される、マリウスの見た風景の特異さにそのまま妥当するだろう。2世紀に生きたマリウスの見たローマの風景を述べる言説の中に、「ルイ14世のパリに見られる中世都市の遺物」や「ゴシック復興のすぐれた建築」への言及が混入する。『享楽主義者マリウス』には、このような重層するアナクロニズムの例が数多い。それは「さまざまな時代の混成された経験がわれわれの一人ひとりを形成している」というペイターの認識に基づいている、と玉井さんは言う。そう言えば、『ルネサンス』のあの有名なモナ・リザの描写にも、あらゆる時代の豊かな経験や夢が重層して表れていた。死に臨んだマリウスの心境は、これら無数の多様な経験が消されたあとの「白く滑らかな心の書き札（タブレット）」であって、やがて「聖なる御手がそこに失われたテキストを書き込むに任せる」、という美しいイメージを以ってこの論文は終わる。この論文では「脱構築」の発想はあからさまではない。はっきり指摘されてはいないが、重ね書きされた過去のすべての言説が薄れ、やがて書き込まれるべき言説を待っている白いパリンプセスト（そこには過去の痕跡が残っている）とは、白い手紙（意味空白の手紙）のように、まさにエクリチュールのありようを示すものではないだろうか。この論文の論証の進め方と精密な文体は、模範的なアカデミックな枠内にある。しかし、この論文の最後にある次のような文に、「創造的批評」の魅惑を感じ取るのは読者の自由であろう。――「そのような与えられた状況にあって、「白」の世界を渇望するとすれば、この薄れた文字の残るパリンプセストを自己の存在と意識することから始めるほか途はないだろう。こうしてここに世紀末文

学のパラダイムができあがる ―― 無垢は経験のあとからやってくる」。

（神戸大学名誉教授）

十四行詩　― 玉井 暲君に ―

筒井　均

I

深緑の山　紺碧の海　澄朗の蒼穹
南国の陽は　高らかに
四方の輝きに響き返す
見はるかす一望千里の大海原

大海原　返す白波　岸を打ち
振返り　山上を仰ぎ見れば
橙の実　たわわに実るその上に
二枚の羽の　鉄柱数基
首を振り振り　風を受け
その力を糧に　蓄える動力源

時移り　人の世の様は変われど
わが胸に　滾る血潮の　熱き想いを
大海原の若者たちと
伝えたい　都の子らに

II

さやかに風の吹く　ふるさとの公園で
耳元で囁く声を聞いたと
詩を書く男は　私に言った
「おまへはなにをして来たのだと……」

山峡の落ち着いた料亭で
「密柑の如き夕陽」を見たと
詩を書く男が　私に言った

それは早や　前の世紀のこと
秒進分歩の　電脳世界には
風の匂いも　茜色の荘厳さはもはや無く

目の前に　鮮やかにあるのは
月探索船かぐやがとらえた
地球の出、地球の入りの映像
想起せよ、その青い球体に蠢く我らを

III

議論の整理が　私の務め
と、研究者は言う
　誰がこう言い　誰がああ言い
　誰が間に入り　誰が繋ぎ
　と　このように展開し——

言葉の森の分析が　俺の楽しみ
と、批評家は言う
　この木の原産地は　ギリシャで
　この葉の光合成は　ローマ風で
　と　森の成立を説明し――

　詩を書く男は　小声で呟く
　心奥の痛みは　何とする

　満天の星のもと
　いのちの声を耳にできれば　万事において文句は無い

IV

哀しい顔して　笑ったよ
寂しい顔して　笑ったよ
苦しい顔して　笑ったよ
怒った顔して　笑ったよ
歪んだ顔して　笑ったよ
涙をうかべて　笑ったよ

明るい顔して　泣いている　私
渋い顔して　笑っている　私

　私には分かっているのです
　人の世が　複雑な網の目でできていることを

そして　少しでも網の目が綻びると
目が一挙に拡がってしまって
いつの間にか　網が糸屑に変わることを
笑うも泣くも　実は　同じなのです

（和歌山大学名誉教授）